
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate
or cite without permission.

新型コロナ感染拡大下における芸能に関する学際的研究

第3回研究会（2021年11月21日開催）報告

日時：2021年11月21日

場所：オンライン

内容：冒頭で代表者の吉田より、研究グループの活動状況や、研究グループのウェブサイト作成の進捗状況等を報告した。また、今回は研究グループの外から、小谷弥生氏、平田晶子氏の2名の参加があったため、その2名から自己紹介をしていただいた。その後、コロナ状況下における芸能の伝承や活動維持の側面に関心を向けてきた、小塩さとみ氏および増野亜子氏からの研究発表がおこなわれた。小塩氏のとくに前半部分では、学校教育における音楽活動の状況が報告され、他方増野氏はインドネシア芸能を実践する日本国内のグループの活動についての報告を行った。年次毎の学習目標が明確にあり、数年のうちに生徒が入れ替わってしまう学校という場においては、決まった期間内に子供たちに音楽の学習や経験の機会を確保しなければいけない難しさがある一方、増野氏の報告したインドネシア芸能グループでは、日本の中で儀礼上の位置づけも持たず、また学校教育など社会的な位置づけを持たないゆえの、活動や活動の場の維持の難しさを抱えている。他方それぞれの場に特有の活動や教育を続ける様々な工夫がなされており、そうした事例についても数多く報告された。両者の報告とも、オンラインを利用した芸能学習のケースを扱っており、オンラインレッスンが与えている影響や、意外にももたらされるメリット、学びの質の変化などについても議論された。各報告の後に参加者全員との質疑応答を行ったほか、最後に全体討論をおこなった。各報告の概要は下記の要旨の通りである。

（以上文責 吉田ゆか子）

報告1

「緊急事態宣言により音楽活動はいかに制限されるか
—学校の音楽活動と地方都市におけるコンサート活動を事例に一—

小塩さとみ

本発表では、コロナ状況下での音楽活動に関する3つの調査報告を行った。第1は2020年度の前期に遠隔（オンライン・オンデマンド）で実施された大学の音楽実技の授業に関する調査、第2は2020年2月から2021年8月までの学校（小中高）における音楽活動に関する調査、第3は2020年2月から2021年10月までの仙台市における演奏会の実施状況に関する調査である。

コロナ状況下で「密」を避けることが推奨され、「不要不急」の活動の停止が要請される中で、音楽活動には多大な影響が出ている。特に政府や地方自治体による「緊急事態宣言」の発出は活動制限の度合いが高いが、コロナ状況下での音楽活動の在り方は、時期により地域により、また個々の組織の判断により、さまざまである。

第1の調査からは、教員と学生が時空間を共有しないと演奏時の「音の響きの聴き方」や「身体の使い方」について教えられないこと、一方で基礎的な演奏技術の習得に関しては遠隔での実施や代替楽器の使用である程度の成果があげられることがわかった。第2の調査では、学校における音楽活動は授業、課外活動、種々の行事での演奏など多岐にわたること、コロナ状況下での活動は市町村の教育委員会の指示に従う形で制度化されているものの、実際には学校の判断により実施状況は多種多様であること、そのために学習機会に大きな差が生じていることが明らかになった。第3の調査では、地方都市ならではとも言える人的ネットワークにより、コロナ状況下での演奏会の実施対策が徐々に確立されていった様子が明らかになった。

コロナ状況下での制限を伴う音楽活動は現在も継続中である。どのような音楽活動が「なぜ」「どのように」避けられ、また「どのような工夫のもとで」継続されているのかについては、今後も多くの事例を集めながら検討していく必要があると考える。

報告2

「空間、場所、環境—コロナ下日本におけるインドネシア芸能活動の耐久力」

増野亜子

この発表では、コロナの芸能活動への影響を主に空間と場所という側面から考察しようとする試みの中間報告を行った。日本でインドネシア芸能の実践活動に関わる音楽家・舞踊化等10数名を対象に2020年、2021年に実施した座談会とインタビューの資料に基づき、コロナの影響を考察した。調査からは上演機会の減少とそれに由来する経済的影響、上演空間の変化や工夫、オンラインの取り組みなどに関する当事者の多様な経験と問題、そしてそれら乗り越えようとする創意工夫のあり方が浮かび上がってきた。発表では稽古や上演のための場所の維持が芸能活動の命脈を保つ上で重要であることを指摘し、また日本とインドネシアにおける芸能実践の文脈の差異についても考えた。発表後、コロナによる移動の

抑制の影響、日本の民俗芸能との比較といった視点からの議論が展開し、「空間 space」「場所 place」概念の再検討、インドネシア芸能に固有の「耐久力」などが今後の研究課題として示された。